

インドの夜は更けて

櫻井 孝

今回は、千夜一夜物語のようなインド駐在員の夜の体験談でも紹介しようと思う。前回に引き続き、切手とお話の内容は一致していないが、ご容赦のほど。

(1) インドで楽しかったのは、所属する組織を越えて、夜に日本人で集まってワイワイと飲むことだった。今はどうか知らないが、当時のニューデリーには、日本人がちょっと立ち寄って飲める居酒屋のような飲食店はまったくなかった。仕方がないから、誰かの自宅に集まって、あれやこれや体験談を話しながら飲むのである。そんなときに出てくるのは、自分はインドでこんなひどい目にあったという、不幸の自慢話であった。

誰かが、自分は空港で税官吏に任天堂のファミコンを見付けられ、子供が正直にファミリーコンピュータだ！などと言うものだから、コンピュータの持ち込みは禁止だと取り上げられ、そうじゃないんだこれはただのゲーム機なんだと説明するのに往生したと言え、別の者が、自分はビデオカメラを見付けられて取り上げられた、その後何回も空港に行って販売目的ではなく自家用だから返してくれと説明したが、半年くらいしたら、そんなものは我々の手許にはない、とはねつけられ、それっきりうやむやになってしまった、と語る。そのうちに病氣自慢が始まる。誰かが、この間A型肝炎にかかっちゃってさ、 γ -GTPが4000を超えた、とか言うのと、別の者が私なんか6000を超えたんだ、勝った！とうれしそうに言う。 Dengue熱にかかって体温が42度にもなり死ぬかと思ったと言え、おれなんか1年に2度も Dengue熱にかかったという記録保持者だ、と言う。

それぞれに苦労した話ではあるのだが、酒の肴で笑い話になり、おれなんかもっとすごい目に遭ったと自慢して、また笑い、酒を飲む。別に自虐的ではないし、それで憂さ晴らしをしているわけでもなく、そんな不幸の自慢をしながら苦境に生きる日本人としての連帯感を高め、よし明日も頑張ろうという気持ちを高めていたんだと思う。

(2) インド人もお酒が好きだ。今でもたまに日本の新聞に載ることがあるが、インドの酒場にはへんなお酒を出す店があるようで、一度にけっこうな数の死人が出ることもある。記事に依れば、どうやらエチルアルコールではなく、メチルアルコール入りのお酒を飲ませるらしい。祖母の話

では、メチルを飲むと目がつぶれる、と言っていたが、それどころではすまなくて生命にも関わるらしい。実際にインドで読んだ新聞記事で記憶するのは、朝になったらバタバタと人が倒れて死んでいる、その先をたどって行ったら1軒の飲み屋にたどり着いた、前夜にへんな密造酒を客に飲ませたことが判明、なんてことが書いてあった。おそろしい話である。

そういうおかしなお酒ばかりではなく、インドにおいて飲酒問題はけっこう深刻らしい。自分がインドに赴任した頃、日本人仲間がニューデリー市内の中華料理店で歓迎会を開いてくれた。席につき幹事がインド人ウェイトレスに「とりあえずビール！」と頼んだのだが、ウェイトレスは「ノー・サー」と悲しそうな顔をする。すると、幹事殿は「あっ、そうか、今日は7のつく日だった……」と独り言を言い、ウェイトレスに「じゃ、スペシャル・ティーね」と目配せする。ウェイトレスは「イエス・サー」という返事とナゾの微笑を残して奥に引っ込んで行ったが、しばらくすると、よく中華料理店で見かける丸いふっくらとしたティー・ポットと小さめの茶碗を人数分持って現れた。注いでくれたところを見ると、中国茶ではなく、何やら冷たい透明な液体だ。こっちはなんのことが事情がさっぱりわからないのだが、幹事殿の「乾杯！」という声に合わせて一口飲んでみると、なんとこれが白ワインではないか！ いったいこれはどういうことなんだ。

聞けば、7のつく日(7日、17日、27日)はインドでは一般に給料が支払われることが多い日なんだそうだ。給料日に飲食店でお酒を提供すると、給料を全部飲んでしまう輩もいて、それが社会問題化したんだそうだ。それで行政府が、7のつく日は飲食店ではお酒を提供してはならないという決まりを作った。それがどれだけ効果があったのかわからないが、「政策あれば対策あり」でうまいことを考えた人がいて、ティー・ポットにワインを入れて出してもらえば一見するとお茶を飲んでいるように見えるからいいじゃないかとなったらしい。店の方も客商売だから、客から言われれば断れなかったんだと思う。自分は正直なところ、そこまでしてお酒が飲みたいか？ と思ったものだが、郷に入らば郷に従えだ、ありがたく頂戴した。

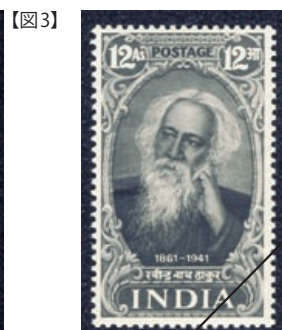
この7のつく日は禁酒デーという決まりは、自分が着任して数ヶ月で廃止となった。なんで廃止になったのかまで

はわからなかったが、気がついたらなくなっていた。お酒で給料を飲みつづす輩がいなくなったのならそれでいいのだが、へんなお酒を飲ませられて死んでしまう人の話は、その後も絶えていないようだ。

(3) あるとき友人数人で、インド政府のカウンターパートである若手官僚たちと飲もうじゃないかということになり、日本人とインド人とで合コン(男ばかりだが)を行った。別にそれで仕事の交渉をしやすくしようなどという下心があるわけではなく、よく顔を合わせている仲間と一緒に酒でも飲もう、という軽い趣旨であった。その中に一人、年配のインド人高官がいた。インド側の取りまとめ役のような感じで誰かが声をかけたんだと思うが、宴が進んできた頃、その高官殿がインド人官僚の若者らに「君たちは寿司というのを知っているか」と語り始めた。「おれは日本に行ったときに、寿司を食べに日本人が連れて行ってくれたことがあるんだ」と言う。お～、いいぞいいぞ、インドの将来を担う若手官僚らに日本食文化の華・寿司のなんたるかを大いに語ってやってくれ。「寿司というのはな、」いいぞ、いいぞ。「丸い皿に載って客の前をぐるぐる回っているんだ。」えっ？日本人側のビールを飲む手が止まる。「自分の好きなものが載った皿を取って食べる。料金はその皿の枚数を数えて支払うんだ。どうだ、合理的だろう。」若手官僚たちは「お～！ ワンダフル！」と感嘆している。日本人側は目を丸くして顔を見合わせる。それって、回転寿司じゃないか…… 回転寿司は自分も大好きだから、その存在を否定するつもりは毛頭ないが、粋のいいお見さんが威勢良く握ってくれるんだとか、そういう寿司本来の説明はどうしたんだ…… しかし、何せ高官殿だから、それは若干違うんじゃないですかとは誰も言い出せない。誰が連れて行ったか知らないけど、もっといいところに連れて行ってあげなよ、と日本人同士で顔を見合わせた。こうしてインド人若手官僚の頭の中に、寿司とは皿に載って回るものということがすり込まれたのだった。

【図1】1957年4月1日、インドで通貨単位が改正された。それまで使われていた1ルピー=16アナ、1アナ=12パイという複雑な通貨単位を、1ルピー=100パイサという単純な百進法に改めたのである。これに合わせて、普通郵便切手も新たな通貨単位のものが発行されることになり、同日、1ルピー未満の額面の切手にはインド全土の地図を図柄とした新しい切手が発行された(各額面とも単色刷り)。ルピー単位の切手は、ここに示したような大版で、多色刷りのものが検討され、実際に11種類の試作切手が作られた。しかし、インド全土で使用される普通郵便切手として考えたとき、紙の使用量や印刷経費の観点から敬遠され、結局このような美しい切手は発行されることなく終わってしまったという幻の切手。

【図2】実際に発行された額面13パイサの切手。1957年4月1日発行(ギボンズ#381)



【図3】ラビンドラナート・タゴール。1861年-1941年。インドを代表する詩人。1913年にアジア人として初のノーベル賞(文学賞)を授賞した。インド国歌の作詞・作曲者。この切手はインドの詩人・聖人を記念した切手6種のうちの1枚。1952年10月1日発行(ギボンズ#342)

【図4】図3の切手を発行するに先立って作成された試作切手の1枚。実際に発行されたものとは、刷色及び外枠のデザインが異なる。

(4) 夏のニューデリーにはヤモリがたくさんいる。冬になるとみんなどこかに姿を隠すのだが、夏は夜になると家のあちこちに出没する。一度あんまりたくさんいるので、自宅の天井や軒先にへばりついているヤモリを数えたら47匹もいた。日本ではヤモリは「家守」の字を当て、家を守ってくれる存在だから大事にするように言われる。インドでもヤモリは大切だ。危ない病気を媒介する蚊を食べてくれるのであるから、これはもう現実問題として大切にしないといけない。しかし、さすがに47匹もいると、なんとも落ち着かない。夜に家の中でくつろいでいても、視界の隅で常にいずれかのヤモリがチョロチョロと動いている。大きさは10センチから15センチくらいか。色は薄い草色で、太いシッポの付け根の辺りにトゲトゲのような部分がある。普段はあまり激しくは動かないで天井にへばりついているが、縄張りがあるのか、別のヤモリが近づくと猛ダッシュして追い払う。その動きの素早いことと云ったら、初めて見たときはびっくりする。日本のかわいいヤモリに比べると、形といい動作といい、戦闘的である。

これが常に天井に貼り付いていてくれるならまだいいのだが、ときどき落ちる。インド人でも特に主婦は苦手らしく、あるとき落ちたヤモリが我が家のベビーシッターの靴の中に潜んでいたようで、すごい悲鳴をあげていた。当時日本人の仲間内で信じられていた話として、ヤモリのシッポのトゲトゲ部分には毒があるということがあった。あるとき、チャイを煮立てていた鍋の中にヤモリが落ちたんだそう。チャイは紅茶の葉を牛乳で煮立てるものだから、鍋の中に知らないうちにヤモリが落ちたとしても気がつかない。で、そのヤモリの出汁のきいたチャイを飲んだ人が亡くなったんだそうで、そんなことから、夏にチャイを煮立てるときにはちゃんと蓋をしようなどということになっていた。この話は、まったく裏が取れていないので、ただの笑い話のようなガセネタの可能性もあるのだが、こんなところからもインドのヤモリはただのものではない戦闘的なヤツというイメージを持ってしまうのだ。